



東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター

The Newsletter **CNEAS**

第67号

● 目次 ●

巻頭言 「次世代の東北アジア研究のために」	1
最近の講演会・研究会等	
東北大学片平まつり 東北アジア研究センター「東北アジア 出会いと発見」	2
東北大学リベラルアーツサロン「古文書が伝える江戸時代一日記から読み解く社会史一」	4
第120回東北大学サイエンスカフェ「電波による減災～地雷検知から東日本大震災復興活動へ～」	4
ワークショップ「地震災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探求」	5
講演会「近代の戦争と宮城」	5
コラム 日本のエネルギー・ミックスと温暖化数値目標を考える	6
著書紹介	6
客員紹介	7
活動風景「ロシア極東の地質調査」	8
編集後記	8

巻頭言

次世代の東北アジア研究のために

東北アジア研究センター副センター長

千葉 聡

彼にとって、それは幼い頃からずっと夢見てきた光景だったに違いない。青い水晶の如く澄んだ水を湛える巨大な湖。分厚いドライスーツを着込んだ潜水士らが、次々と水底から浮き上がり、彼のために湖の底から採集した奇妙な姿の水生动物たちを運んでくる。

今夏、私はひとりの修士課程学生を連れ、ロシア科学アカデミーの共同研究者や支援者らとともにバイカル湖の生物調査を行った。この学生は幼少期に本で知ったバイカル湖とそこに住む固有の生物の研究にずっと憧れ、いずれその夢を果たすために、大学では学習する第二外国語としてロシア語を選択したという。私の研究室を大学院の配属先に選んだのは、夢を実現できる可能性が最も高いと踏んだからだった。

言うまでもなく、本センターは研究所組織であるため、学生定員を持っていない。しかしその一方で、大学組織である以上、東北アジア研究を担う次世代を育成することは、我がセンターに課された重要な使命であろう。実際、本センター教員は各研究科の協力講座として大学院生の研究指導を行っている。如何にすれば彼ら・彼女らを一人前の専門家に育て上げることができるか、これは本センター教員が良く考えるべき課題である。必要なことの第一は、鉄は熱いうちに打て、奇貨居くべし、だろう。機会を失すればどんな才能も日の目を見ずに終わる。またその機会を与えるタイミングも重要だ。第二は、一つしか知らぬ者は、一つをも知らぬ、であろう。若い研究

者にとって大切なことは、早い段階で多様な分野の異なった視点や見方に触れて視野を広げることだ。地域研究のような諸学の協働による総合的な研究が必要な領域では、特に重要な要素だろう。

以上の二点を満たすうえで、本センターは非常に恵まれた環境にあると言える。研究所組織であるがゆえに見落とされがちだが、こうした育成の場としてのアドバンテージを活かさない手はない。若手のいない分野は減ぶ一これはあらゆる研究領域に当てはまる鉄則である。

さて、熱いタイミングで機会を得た件の学生は、さらなる情熱をたぎらせつつ、今次の訪口で得た彼自身の人脈を利用して、次年度の調査計画を自ら立案中である。もちろんまだ若い彼の仕事が、このまま順調に進むとは限らない。様々な落とし穴も待ち受けているだろう。しかし若さは一方で、それを乗り越えるための最強の武器である。

ところで、彼がまだ大学生の頃、彼に対しロシア語の講義を行い、その手ほどきをしたのは、もちろん我がセンター教員のひとりである。このことが持つ意義も、最後に強調しておきたい。



最近の講演会・研究会等

① 東北大学片平まつり
東北アジア研究センター
「東北アジア 出会いと発見」
(10月10日、11日)



モンゴル・ゲルの展示



高山氏の講演



佐藤研究室の模擬地雷探索

本年10月10日(土)、11日(日)の両日、東北大学片平キャンパス等を会場として、恒例の片平まつり2015が開催された。片平まつりは、東北大学の附置研究所・センター(金属材料研究所、加齢医学研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学国際研究所、東北アジア研究センター、学際科学フロンティア研究所、原子分子材料科学高等研究機構)に東北大学史料館が加わって開催される市民向けの研究公開企画で、2年に1回開催されている。各組織の日頃の研究内容を市民に紹介し、大学に設置された研究所・センターの役割を知っていただくのが目的である。今回の全体テーマは「感じてみよう 科学のチカラ」で、片平キャンパスと、加齢医学研究所がある星陵キャンパス、それに災害科学国際研究所がある青葉山新キャンパスを会場として開催された。

東北アジア研究センターは、「東北アジア 出会いと発見」と題して、片平キャンパス内さくらホールを主会場として展示を行った。理系の研究展示が多いなかで、本センターは人文・社会科学系と理系を擁する地域研究センターとして、毎回異彩を放つ存在となっている。

今回の展示は、文系から高倉浩樹教授(ロシア・シベリア

研究分野)と岡洋樹教授(モンゴル・中央アジア研究分野)の2研究室、上廣歴史資料学研究部門、理系から佐藤源之教授(資源環境科学研究分野)の研究室が出展した。

高倉研究室のテーマは「永久凍土の東シベリアで馬を飼うサハ人の暮らしと環境」。高倉教授は、社会人類学を専門とし、ロシア・シベリアのサハ共和国を中心とした牧畜民の研究を行っている。冬には気温が零下40度以下にまで低下するサハ地方には、馬やトナカイなどを生活の糧とする様々な先住民が暮らしている。今回の展示では、高倉教授が調査地で撮影した映像や写真が展示され、サハの独特な文化と環境が紹介された。

岡研究室ではモンゴルの歴史を研究している。今回は「みて!ふれて!モンゴルのお家(ゲル)のしくみと人々の暮らし」と題して、モンゴル遊牧民が用いるゲルと呼ばれる天幕と民族衣装などを展示するとともに、モンゴルの歴史・文化に関するパネル展示を行った。訪れた市民にはモンゴルの衣装の試着がたいへん好評だった。

上廣歴史資料学研究部門のテーマは「古文書を読み解き保存しよう」。同部門では、民間に所蔵される歴史文書の保全活動を行うとともに、市民に向けた「くずし字講座」、公開



伊達氏の講演



高倉研究室のサハの映像展示



上廣歴史資料学研究部門のくずし字コーナー

講演会を数多く開催している。今回の展示でも、同部門の荒武賢一朗准教授、高橋陽一助教、友田昌宏助教が訪れた市民に古文書の読み方やくずし字の書き方を解説し、歴史的な資料の保全の重要性を訴えた。

理系からの展示では、佐藤研究室が「電波科学でひらく世界 遺跡・防災・地雷」と題する展示を行った。佐藤源之教授は、レーダ技術を用いて、カンボジアやクロアチアでの人道的地雷除去、宮城県など地震・津波被災地での防災のための調査、あるいは遺跡探査での活用など、さまざまな研究活動を行っている。今回は、カンボジアなどでの地雷除去に活躍している地雷検知器 ALIS を展示し、市民に実際にレーダを使って砂に埋めた模擬地雷を探してもらった。

本センターでは、片平まつり全体企画として、10日(土)15:30からNPO法人国際地雷処理地域復興支援の会理事長高山良二氏による講演「カンボジア地雷原の村での挑戦」をさくらホール2階会議室を会場として開催した。高山氏は、今も地雷が残っていて住民の生命を脅かしているカンボジアの村に入り、地雷の除去作業に従事している。今回の講演では、現地での実際の地雷除去作業や、佐藤研究室と協力したALISでの地雷探査の様子とともに、危険と隣り合わせで暮

らす人々の生活が紹介された。

また11日(日)16:00には、同じさくらホールで東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所第6回学術交流連携講演会「北の大地で砂糖を作る——仙台藩士のあまい企て」が開催された。講師は伊達市噴火湾文化研究所学芸員の伊達元成氏である。講演では明治時代に宮城県亶理町から北海道伊達市に移住した武士たちが、艱難辛苦の生活の中で、わが国初めての砂糖工場を開き、産業を興した事実が紹介された。

二つの講演は、いずれもさまざまな困難に直面しながら暮らす地域の人々のたくましい暮らしを垣間見せてくれ、地域を研究する我々の目を開かせてくれる示唆深い内容だったと言える。

今回の片平まつりには、1万人を突破する多数の市民が来場し、たいへん盛況であった。東北アジア研究センターの展示にも、主会場のさくらホールの展示に3,000人、屋外のモンゴル・ゲルの展示に4,000人以上の見学者があり、用意したパンフレットなどが足りなくなるなど、うれしい悲鳴が上がっていた。

(岡洋樹)

② 東北大学リベラルアーツサロン 「古文書が伝える江戸時代 —日記から読み解く社会史—」(8月21日)

東北大学では2か月に1回のペースで「東北大学リベラルアーツサロン」を開催している。文系の研究者が専門分野について、中高生・大学生・社会人向けにわかりやすく説明することがこのサロンの目的である。通常の講演会とは異なり、講師と参加者がひとつのテーマをもとに意見を交換し、お互いに知識を共有することが特徴といえるだろう。

筆者が講師を務めた第36回は、2015年8月21日(金)に、せんだいメディアテーク1階のオープンスペースで開催された。いつもサロンを楽しみにされている常連さん、今回のテーマに関心を持って参加された方々、そして図書館の帰りに「何かやっているな」と立ち寄られた人まで、おおよそ100名近い来場者があった。気軽にお茶を飲みながら、楽しい時間を過ごすことができたように思う。

今回は表題にあるようなテーマで、江戸時代の人々が遺した日記の内容を紹介し、スタイルや執筆の目的、さらに具体的に『曲亭馬琴日記』を読み解きながら、当時の社会的背景について議論をおこなった。江戸時代後期の作家、曲亭馬

琴は多くの著作を出版したが、それと同時に日記も見事なまでに細かく書き留めた「筆まめ」の人物である。

本論では江戸時代の話を中心に展開したが、そのあとで参加者にはある問いかけをしてみた。それは、①皆さんは日記を書いていますか、②生活のなかで「文字を書く場面」はありますか、の2点である。①はそれほど多くないが、毎日の出来事などを丁寧に書いている方も数名おられた。後者は仕事以外でペンを手にすることが少なく、パソコンやスマホの普及で、自筆の手紙を書く機会も減っているのだろう。全体として、参加者各位はいろいろな観点から関心を持たれた様子で、意見交換の時間を超過しつつ、盛会のうちに終了した。なお、これまで開催された内容は<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/hplas/index.html>で動画をみることができる。

(荒武賢一朗)



③ 第120回東北大学サイエンスカフェ 「電波による減災～地雷検知から東日本大震災復興活動へ～」 (9月25日)

大学の研究は難しそうでわからない、聞きたいことも聞きにくい、大学の先生と話すチャンスも無い。東北大学サイエンスカフェは、そう思っている人たちと大学の教員が、気軽に話し合う場であり、毎月1回、定禅寺通りに面した「せんだいメディアテーク」で開催されています。また東北アジア研究センターが中核となり開始されたりベラルアーツサロンは、その文系版です。

2015年9月25日に、私が「電波による減災～地雷検知から東日本大震災復興活動へ～」をテーマにカフェを担当しました。身の回りでは携帯電話、テレビなどがありますが、この日のテーマはレーダーです。私たちが2009年から進めているカンボジアでの地雷除去には、私たちが開発したレーダーと金属探知器の複合センサーであるALIS「エーリス」が活躍しています。まずALISの実物をお見せし、仕組みや実際の地雷除去活動の様子をスライドで紹介しました。私たちはALIS 2機をカンボジア政府に貸与し、これまでに地雷除去面積 254,86㎡、検知地雷 86個の実績を残しています。

次に、地中レーダーと金属探知機の違いについて、会場に持ち込んだ沢山の実験装置を使って説明をしました。研

究室で学生と自作した電波を感知するとLEDが光る電子回路を使い、約60人の参加者が8つのテーブルに分かれ、参加者が持つ

ている携帯電話から電波が出てくる様子を体験してもらいました。また携帯電話をプラスチックや金属の箱に入れ、電波が出るかどうかの実験をしてもらいました。これに続いて、私がラジコン送信機を水槽やバケツの土の中に沈めても外に電波が出てくることを実験で証明しました。地中レーダーは地下を伝わる電波を使って埋設物を捜します。

カフェの後半では、参加者の質問に答えながら、最近私たちが行っている東日本大震災の津波被災者の海岸での捜索活動、また御嶽山の被災者の金属探知器と地中レーダーでの捜索などについて紹介しました。当日の様子は東北大学動画サイト<https://www.youtube.com/user/tohokuuniversity>で紹介されています。

(佐藤源之)



携帯電話から出る電波を実験で確かめる参加者たち

4 災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット主催ワークショップ

「地震災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探求」(10月24日、25日)

災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニットでは、ワークショップ「地震災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探求」を10月24日(土)、25日(日)に東北大学東京分室にて開催した。本ワークショップは、センター20周年記念行事である。

初日は、海外事例との比較として、ガジャマダ大学のスハディ氏、四川大学の閔麗氏、カンタベリー大学のS.ブーレイ氏、長崎大学の滝澤克彦氏に発表していただいた。それぞれ、2004年インドネシア・スマトラ沖地震や2006年のジャワ中部地震、2008年の中国四川地震、2011年ニュージーランド地震、東日本大地震を取り上げ、自身が関わった災害支援について報告した。地域社会の民俗芸能や祭りについての調査、災害時における通訳の役割、災害支援としての宗教者の役割など多様な災害後の社会状況が浮かび上がってきた。復興において工学や医学といった理工系の学問領域による貢献とは異なる、人文学系学問による貢献について議論した。また、「貢献」の評価を行う時期について、災害直後、5年、10年、50年など時期によって評価される貢献が異なるという意見が述べられた。

2日目は、日本の事例として、國學院大学の黒崎浩行氏、

東北大学の木村敏明氏、大阪国際大学の三木英氏、東京文化財研究所の今石みぎわ氏、筑波大学の木村周平氏、東北大学の芳賀満氏に報告していただいた。東日本大震災後にどのような実践が行われたのか、神道宗教者の実践、宗派を超えた臨床宗教師の試み、被災地における民俗や地域文化の記録、地域復興における都市工学研究者との協業などについて各自報告した。さらに、考古学者にとっての災害の特質と文化財レスキューや震災遺構の保存、20年を経過した阪神大震災の記憶の継承と被災者の連帯の現状についても報告があった。

参加者は、発表者を含めて29名であり、活発な質疑や討論が行われた。国際比較の難しさ、災害後に人文学研究がどのように貢献できるのかなど、議論の中で大きな課題が浮かび上がってきた。こうした研究者による研究交流や議論の積み重ねが災害を忘れないこと、減災、防災への足場を踏み固めることになると感じた。

(山口陸)



ワークショップ後の記念撮影

5 講演会

「近代の戦争と宮城」(10月31日)

上廣歴史資料科学研究部門(以下部門)は仙台市歴史民俗資料館との共催で、10月31日(土)、仙台市戦災復興記念館にて講演会「近代の戦争と宮城」を開催した。戦後70年の節目を迎え、近代に起こった数々の戦争が地域に何をもたらしたのか、また、戦争によって地域の実態はどのように浮き彫りにされたのかを皆で考えたいという意図のもと企画されたものであった。冒頭に平川新部門長(宮城学院女子大学学長)から挨拶があり、続いて以下の講演が行われた。

- ①友田昌宏(部門助教)「西南戦争と旧仙台藩士」
- ②大谷正(専修大学文学部教授)「日清戦争に従軍した『東北新聞』記者桜田孝治郎—戦争情報はどのように仙台に伝えられたのか—」
- ③佐藤雅也(仙台市歴史民俗資料館学芸室長)「誰が戦死者を祀るのか—近代仙台の慰霊と招魂—」

友田の講演は、西南戦争時、補充の兵員として士族を中心に臨時巡査の召募が行われる過程で、宮城県ではいかなることが問題となったのか、臨時巡査として戦地に赴いた旧仙台藩士を支えていた戊辰戦争の雪辱の意識とはいかなるものだったのか、戦後、宮城に帰県した臨時巡査の動向

が関心を集めるなか、どのような問題が議論されたのかについて考察した。大谷氏の講演



大谷講演のようす

は、仙台に駐屯する第二師団の日清戦争時の動向、当時のメディアのなかで地方紙の置かれた状況を踏まえたうえで、『東北新聞』の記者として日清戦争に前後3回、戦地に従軍した桜田孝治郎の経歴と、彼が戦地で何を見てそれをどのように宮城に伝えたのかを紹介し、日清戦争時の報道の有り様について論じた。佐藤氏の講演は、戊辰戦争から日露戦争後あたりまでの慰霊と招魂の変化を追ったもので、西南戦争後に旧仙台藩士と仙台鎮台によってはじめられた戊辰・西南両戦役の招魂祭が、後者が前者を取り込むかたちで一本化され、さらには日清・日露戦争をへてその内実が変化していく、一連の経緯が詳細に解説された。

当日は200名近くの方々に御参加にいただき、なかには学生や東京からお越しの方もおられ、このテーマに幅広い層が関心をよせていることをうかがわせた。(友田昌宏)

コラム

日本のエネルギー・ミックスと 温暖化数値目標を考える

温暖化は平和を脅かす。たとえば、シリア難民問題の要因の一つとして地球温暖化がある。シリアでは2006年から2010年にかけて深刻な干ばつが発生した。多くの農村が崩壊し、すでにイラク難民であふれていた国境沿いの都市に150万人以上のシリア農民が流入した。まさにこのような都市で2011年の「アラブの春」につながる暴動が起きた。

福島第一原発の事故後、日本では温暖化問題への関心が薄れた。理由の一つは、「原発は温暖化対策に必要」「安い化石燃料発電が必要」「省エネは無理」という言葉を簡単に信じ込んでしまっている人が多いからではないか。

現在、世界の多くの国で、保守政権、化石燃料会社、大手電力会社、重電メーカー、エネルギー多消費企業が一致団結して原発と化石燃料発電を維持しようとしている。その目的は権益維持である。

筆者は何人かの研究者と「日本のエネルギー・ミックスと温暖化数値目標を考える研究者グループ (Japan's Union of the Concerned Scientists on

Energy Mix and Climate Target : JUST)」という組織を作って日本の温暖化対策数値目標とエネルギー・ミックスに関する政府試算の

問題点を発表した。そこでは、省エネや再生エネをより多く導入すれば、原発なしでもより野心的な温室効果ガス削減目標の設定が可能であり、中長期的には電力価格が低下し、雇用が拡大し、国全体では経済が発展することを示した。

11月末からパリで国連気候変動枠組み条約締約国会議 (COP21) が開かれる。「日本の削減目標は国際的に遜色がない」というリーダーの発言があったが、国際社会の認識とは全く逆だ。一部の人々によって、また彼らの言葉を簡単に信じてしまうことによって、貧困、紛争、難民問題が激化し、彼らや特定産業は潤うものの、国全体の経済発展や平和は遠のいている。(明日香壽川)



2014年9月ニューヨークで40万人が参加したとされるクライメート・マーチの様子。最近の米国では温暖化問題が社会正義や民主主義の問題として位置づけられている。



BOOKS 著書紹介

東北アジア研究センター専書10号 スターリンと新疆 1931 - 1949

寺山恭輔著 2015年3月
社会評論社

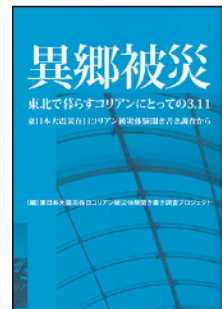


中国の新疆地方はかつて交通面で中国本土から隔絶され、ロシアの圧倒的な経済的・政治的影響力のもとに置かれていた。ソ連が特にその関与を増大させ、毛沢東に引き渡すまでのスターリン時代に焦点をあて、軍事的関与を含む対新疆政策の実態を可能な限り明らかにすることを本書の課題とした。僅少な先行研究を補うべく、モスクワの諸史料館(党、政府、経済、軍)に保管されている一次史料を丹念に拾い集めた点に特徴がある。ソチ五輪以降の一年余り、ウクライナ政変とロシアによるクリミア併合、ウクライナ東部への侵攻等の諸事象と本書の執筆が重なったが、ロシアが時折垣間見せる国境外部地域への膨張、類似した政策の先例として格好の事例を本書は提供し、その点きわめて現代的な意味を有していると実感しながらの執筆であった。将来的な中露関係への配慮のためか、本問題に関する一次史料へのアクセスにはいまだに大きな制限が設けられていることを付言しておく。(寺山恭輔)

センター関連出版物

異郷被災——東北で暮らすコリアンにとっての3.11 東日本大震災在日コリアン被災体験聞き書き調査プロジェクトから』 東日本大震災在日コリアン被災体験聞き書き調査プロジェクト編

2015年7月 荒蝦夷



本書の企画は、2012年、プロジェクト代表の赤坂憲雄(学習院大教授)氏の一つの言葉から始まった。「震災後、1枚の写真を見た。若い女性2人が歩いて避難している写真だったが、その中1人の女性は老婆を負っていた。後でその若い女性たちが中国人の嫁さんたちであることが分かった。ふっと、被災地の外国人はこの災難でどうしているのか気になった」。そこから、学者やジャーナリストをメンバーとする、在日コリアン被災体験聞き書き調査プロジェクトが始められた。

3年間の時間をかけて収集された聞き書きは、被災地の岩手県から福島までの3県に住む42組の在日コリアンのストーリーで纏まった。42組のコリアンは、在日1世の高齢者を始めとするオールドカマーから、結婚、仕事、留学で来日したニューカマーまで、年齢も属性も多様である。それぞれ異なる境遇の中での多様な被災経験。そこから読者は、異郷の地で地域民として共に生きる移住者の強くて柔軟な生き方と出会い、日本の共生への課題を見つめることができるだろう。(李善姬)



●客員教授

エルデムト
(Erdemtu)

本年10月1日から、中央民族大学モンゴル言語文学部のエルデムト教授がセンターの客員教授として赴任された。

エルデムト先生は、中国内モンゴルのオンニュート旗出身のモンゴル族で、1969年生まれ。ご専門はモンゴル文献学で、研究対象としては、北元時代のモンゴル仏教文献、モンゴル年代記、モンゴル古典文学、とりわけ17世紀から西部モンゴルのオイラート族によって使われてきたトド文字文献を中心に携わってきた。2005年には、トド文字を制作した学問僧の生涯と事績をとりあげた「ザヤ・パンディタ・ナムハイジャムツの研究」と題する学位論文で博士号を取得されている。

先生は、2000年以来現在に至るまで毎年3・4カ月の期間、新疆ウイグル自治区のロシア国境に近いイリ川流域のオイラート族の間に保存されてきたトド文字文献の調査研究を行い、これまでに

3千点以上のトド文字文献を発掘し、それらの整理と保護に尽力してきた。こうした活動が実を結び、2014年には中国人民大学国学院にオイラート学・トド学研究センターが設立され、先生はセンター長に就かれたほか、ハンガリーのローランド大学中央アジア研究センターと協力して、2015年5月には国際学術雑誌Oyirad Studiesが創刊された。

エルデムト先生は、モンゴル語文学の作家としても名高い。1999年にはモンゴル語詩集『翼のない鳥』、2014年にはエッセー集『遙かな月の光』を出版され、モンゴル文学ボルジギン賞(2012)、民族文学賞(2013)を受賞されている。

先生は、2016年1月末までの4ヶ月間センターに滞在され、トド文字文献の研究をおこなうとともにプロジェクト研究「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動に参加する。(栗林 均)



●客員准教授

デレーニ アリーン
(Alyne Delaney)

2015年10月1日から2016年1月31日までの期間、東北アジア研究センターの客員准教授として働くことになったデレーニアリーンと申します。デンマークのオールボー大学理工学部開発計画学科から来ました。受入は高倉浩樹先生です。文化人類学が専門で、人々がどのように自然資源を使いながら生活を営むのかという関心があって研究を始めました。そのため、最初の私の研究は宮城県七ヶ浜町の実験養殖場における社会組織と経営がテーマでした。これはフルブライトの博士研究奨学金を得て行われたもので、その時には東北大学文学研究科文化人類学研究室に受け入れてもらいました。

その後、私は世界における漁業文化と政策による沿岸部および漁民の生活への影響についての研究を行ってきました。特にグリーンランド、北ヨーロッパ、カンボジア、ボツアナで調査をしています。最近の研究は東日本大震災後の実験養殖場の小グループにみられるイノベーションと適応についての研究です。とりわけ

私の関心は、人々の新しい事態への対応が、どのように地域社会のレジリエンスと持続性につながるのかにあります。仙台での滞在中、これまでの七ヶ浜調査に加えて、新たにその北東にある東松島での現地調査も計画しています。

七ヶ浜海苔養殖家のなかでは、彼らが復興助成金を受け取るために必要とされる政府から条件、つまり経営小集団の形成が、どのように影響をもたらしているのか調べようと思っています。集団で働くことは、宮城県の海苔養殖家によっては極めて大きな変化です。というのも彼らはこれまで記録されている限り、個人の意思決定を重要視し、独立的であったからです。3.11以降、東松島の海苔養殖家グループのなかには、支援者を得るために、フェイスブックを利用することを選び、動画や写真などの映像手段を用いて、回復と再建を実行している人々もいます。私の調査のもう一つのテーマは、震災後の適応としてこのような社会メディアの利用を調べることであります。

活動
風景

ロシア極東の地質調査

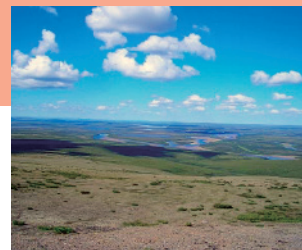
東北アジア研究センター特任助教 町 澄秋

筆者はオフィオライトという地質体を構成する岩石の研究を行っている。オフィオライトとはかつての海洋プレートの断片が陸上にのし上げたもので、地球のマントルを構成していたかんらん岩、地殻深部を構成していた斑れい岩、地殻上部を構成していた玄武岩とそれを覆っていた深海堆積物からなる。このオフィオライトの岩石を調べることによって海の下の地殻の形成、その下のマントル内でのプロセスを読み取ることができる。特に、地球の地殻の下に存在するマントルの物質を直接採取することに人類は成功していないためオフィオライトは、マントル内でのプロセスを理解する上で貴重な機会を与えてくれる。

私はこれまでロシア極東地域で2度の調査を行った。その内、メインで研究を行ってきたウスチベラヤ・オフィオライトの調査について書きたいと思う。ウスチベラヤ・オフィオライトは、ベーリング海に面したチュクチ自治管区の州都アナディールからアナディール川を約300km遡ったところに位置する小さなウスチベラヤという村の周辺に露出している。北極圏に近いこの地域は、地質調査において大きな利点がある。それは、植生がほとんどないということである。日本のような温帯では、樹木が生い茂り、我々地質屋の見た岩石や地層の露出が限られているが、この地域は、我々の見た岩石がむき出しなのである。私が調査で訪れたのは2007年7月～8月、極域に近いこの地域では、白夜に近い日が続く夏の約1か月間である。私にとっては初の海外への渡航であった。日本からは私を含め3名、ロシア側の共同研究者が5名、そこに後から紹介する車のドライバーが1名の計9名のチームである。気候は、日本でいうと春くらいで、晴れた日に調査で歩いていると少し汗ばむような気温であった(年によって結構違いがあるようで、2度目に訪れた時は寒くて、海には流氷が漂っていた)。調査はキャンプ生活である。日本での地質調査では、



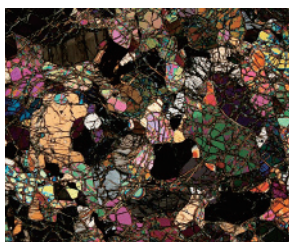
筆者とクマの足跡



調査地域の風景

徒歩と車が主な移動手段となるが、ロシアのこの地域では、徒歩と戦車のようなキャタピラ車が移動手段となる。というのも舗装道路がないどころか、そもそも道がないのである。大平原の中に轍になっている所があり、それがこの地域でいうところの“道”である。キャタピラ車なので道なき道も進めるが、そんなときは、ただでさえ悪い乗り心地が、車の天井で頭をぶつけるほど悪くなる。このキャタピラ車での移動は、基本的にはキャンプ地を移動するときを使うだけで、日常の調査は徒歩で行った。岩石が露出している尾根沿いを歩き、どんな岩石がどこに露出しているのか産状を記載しながら、サンプルを採取する。調査で、歩き回るのは慣れてはいるからいいが、怖いのがヒグマである。幸い直接目にしたのは、こちらが船に乗っているときだったので、危険な目にはあわなかったが、新鮮なクマの足跡を見ながら調査するのは、冷や冷やした。調査中・日常を通してつらかったのは蚊である。永久凍土のある地域は、夏になると湿地帯に近い状態になる。そんな水たまりで大量に繁殖したボウフラが極域の短い夏に蚊となって飛び回るのである。この地域では調査するには防虫ネットが必携である。そんな中タンクトップ姿で蚊を意に介さず調査できていたロシア人研究者には驚かされた。過酷な調査生活での楽しみは食事である。主食は、米・パン・グレーチカ(そばの実)・パスタで、おかずは缶詰・瓶詰料理。ときどき魚やきのこなどの食材を現地調達したり、現地の人にトナカイの肉を分けてもらったりしていた。調味料の限られたキャンプ料理なので、終盤にはかなり飽きてくるのだが、そんなときに車のドライバーが現地調達した鮭で作ってくれたウハーというスープがすごく美味しかった。調査を終えて、アナディールに戻ってきてから、パーニャというロシア式の公衆サウナへ行って、汗を流した。約1か月ぶりに浴びるお湯、その後の冷たいビール、文明社会に復帰したことを実感した。

この調査の苦労の末、持ち帰った試料を解析することで、東北アジアの地誌、地球のマントルプロセスの解明に取り組んでいる。



かんらん岩の顕微鏡写真(横幅: 調査で使用したキャタピラ車約5mm)



編
集
後
記

今年最後のニューズレターをお届けします。大盛況だった片平まつりの記事など、充実の内容となっています。12月5日・6日には、センター創設20周年記念式典・シンポジウムが無事挙行されました。日本研究を主とする私には大きな課題なのですが、混迷を深める情勢の最中だからこそ、多様な角度から「東北アジア」にコミットしていく必要があるのでしょうか。学術研究は、これからも混迷を切り開く旗手であるべきだと思います。(高橋陽一)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第 67 号 2015 年 12 月 25 日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>



植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。